

## ソ満国境六年

### 抑留拷問に耐え

香川県 大塩 義 武

大正六年十一月、香川県大川郡津田町で生まれた私は、家業の農業と木工作、建具商を業としていた。私の時代は学校を卒業すると徒弟として手に職をつけるのが通例であった。私も津田町で家具の製作の見習として弟子入りしたのであるが、修業中不幸にも主人が死亡したため若い身ながら自立した。私も親に早く死なれ、戦時となって材料入手も困難となり、商売の前途にも不安があるなどと考えていた折の昭和十四年、満州国の警察官の募集があった。勤務地が僻地のため給与が良いので、黒河省漠河県のオロホハタの隊に勤務することになった。私の任務は国境警備と部落の運営に従事することであった。

入った時は、自分の寝る所もなく、役所の事務室に

アンペラを敷いて寝たが、その後住む所を町で建ててもらった。そこには日本人は二人しかいない。しかし、この地域は興安嶺の木材集産地で、冬から夏にかけては四千人もの季節労働者が入って来た。木材会社にも日本人は二人しか居ない。他は中国人と露・中の混血の人、白系露人であった。

国境事件は時々起こった。ソ満国境を越えてソ連の逃亡兵が来る。ソ連の警備隊員が白旗をかかげて逃亡して来るのである。その逃亡兵をこちらが逮捕する。我が方の警察は私と通訳の老人、満人の警防隊長で編成していた。従って日本人としてはほとんど孤独であると言ってもよかった。

逃亡者には物を与えると大変喜ぶ。私の所は国境だから、ソ連軍に逃亡者を奪回される恐れがあるので、逃亡者の中に入れ、山の中を通過して本部へ連れて行く。本部との距離は一泊二日ぐらいかかる。一部落と次の部落の間隔は五里（二〇キロメートル）あり、その間に家は一軒ぐらいしかない。それを夜通し行くのだから十里（四〇キロ）以上を騎馬や橇で行く。日本

人は元上等兵と私の二人、配下の中国人十五人の約十七、八人が一つの隊となっていた。中国人は独身者、妻帯者と別々の家に住まわせていた。

私はここに約五年間いた。日本人の警察官は気が荒く酒飲みが多い。南の方からの転勤者は、気候が違ひ、環境が激変している所での勤務だからか、一癖も二癖もある者が多かった。私は酒も飲まず、タバコも吸わぬので間違いを起こさずにすんだ。

その様な勤務中、家内をもらいに日本に帰り、昭和十九年、五年で孫河に転勤になり、応召を受け召集されることになり、終戦、シベリア抑留等となるのだが、思い出したことも多いので、もう一度振り返って私の体験談をお話したい。

満州国警察官採用試験に合格したのは昭和十四年四月二十日付であった。新京の中央警察学校入校三カ月で卒業。黒河省漠河県オホロハタ（額勒和哈達）隊に勤務を命ぜられた。本隊の漠河（県公署所在地）で満軍警備隊の暴動が起きたとき、有名な辻政信参謀が現

地に向かい叱責、罰するどころか、「あまりにも不便な、何の娯楽設備もない所に配置し御苦労をかけた」と慰勞の一席を設けて気を和らげ、それ以後満軍の配置をなくしたということである。

漠河本隊の十分の一にも足りない額勒和哈達で、黒竜江も江名が無くなり、アルガン河と変わり、満州里、ノモンハン方面が源流となる。鉄道も黒河、満州里、満州側の最終地点より中間で北緯五十三度四分に位置する最奥地、酷寒地帯に位置する。

日本人は二、三人、満系警察官二十人、部落は三十軒約三百人程である。シルカ河（ソ連）、アルグン河（満州とソ連）、額勒和哈達河（満側）、金山川（満側）で四つの河の合流点で大興安嶺の木材の生産地である。夏期間だけの季節労働者（苦力）が二千人程出入りする。それ故、満名では「四大了河」と別名がある。

昭和十六年十二月、巡察隊より「満州からソ連へ越境した足跡を発見した」との報告があり、直ちに満系警察官三人を連れて現地に到着、詳細に足跡状況を調

査していると不信な点を見付けた。私は警察に「よく足跡の形容を調べろ」と言ったが三人とも「ソ連に向かっていている足跡だ」と言う。「良く調べろ」と注意すると一層声高に「ソ連に向かっていている足跡だ」と答える。それではと、それぞれの足跡の底部の雪を払い、高低の微妙な相違点を指摘した。前方へ進めば普通は指先の方が深くならなければならないのに踵の方が深くなくなっている。「深い深い」と言い出した。この足跡はソ連に行くように見せて実は後ずさりしている。

「本当だ、本当だ」と言って彼等も判ってくれた。「遺留品があるかないか良く調べろ」と言うのを掻き分け調べると煙草の吸い殻約一センチぐらいを見付けた。良く調べ確認すると「寿」という字が判読される。ソ連からの軍人と満州側のスパイとが交渉終了後別れたと判断出来た。

ソ連側の足跡ははっきりと往復している。満州側の方は行った形になっているが、真実はそうではない。後下がりて帰っている。萬寿煙草を吸っている者に間違いは無い。萬寿煙草は高級品で普通の満人が吸えな

いぜいたく品である。「吸っている者を調べろ」と隠密に調べた結果、四日後になって二人いることが判った。一人は身元確実で財産もある。他の一人は遊びが多く、吸える程の収入が無い筈である。前後左右四人で囲み容疑者を逮捕留置、翌日、日本隊への引き渡しを日系の山岸警長に命じた。注意してあったにもかかわらず、運悪く下流の洛古河警察隊に寄った際、スパイに自分の三八式銃で発砲され、ソ連側に逃亡されてしまった。逃げた魚は大きいというが、このスパイだけは間違いなく大物であつたらう。

私は勤務地到着の冬、私費（満系警察官一カ月の給料）で満人の狩人と共に一週間大興安嶺の山中で野宿生活をし、狩人から野宿の仕方、野獣の足跡の見分け方、ならびに糞の見分け、足跡の経過時間、風向き、山の尾の深さ、方向、足音のしない歩き方、冬場雪の上に残さない歩き方等を多様にわたり念入りに教えて頂いた。

これを反復練習をしているうち、痔を患って困り、

薬品の無い所だから一カ月の断食修業をし、いろいろな貴重な体験したことが、ソ満国境警備活動に非常に有効活用することが出来た。そして不思議に判断力が鮮明に湧いた。また、満人警察官や住民達と共に満語が出来るため肚の底からふれ合いを深めて行動したからこそ、僻遠の寒村で厳しさに耐えてこられたのだと思う。

これは、最奥地ソ満国境警備中の秘話。ある日の午前二時四十分、黒竜江を横断し越境侵入してきた兵を逮捕連行して来た。警備をなお一層厳重にすると共に、四時過ぎになるとソ連側の行動が激しくなった。騎馬兵七〜八騎が、上流へ行ったり下流方向へ行ったり動きの激しさが黒竜江の水盤に大きく響いてくる。夜明け（八時三十分）頃、ソ連側より白旗を左右に振っている。無視していると更に二度、三度と振る。もう無視は出来ない。我が隊は満州国旗を出してこれに応答し左右に振った。来てくれと、白旗を縦に振って来た。露語の出来る老人一人が旗を持ち、村の警防

団長と私の三人が出発準備を整え、部下に警備の位置につかせ、黒竜江へ前進中央まで行き立ち止まると、満語で「五〇メートル程前進してくれ、国境線の水深部だ」と話してきた。（私は満語の三等検定試験に合格し通訳の資格があった）よし満語だ、これは良かった。しめしめと内心思った。彼我の距離は約二〇メートルまで接近停止する。

「何の用件があるのか？」と問うとソ連側が「今朝早く兵隊が一人満州国へ逃げた」と言う。「今朝、侵入足跡を発見し鋭意捜索中であり、まだ逮捕していない」「捕まえたら殺さず帰して欲しい」「貴隊とは常に好意的で、牛馬が侵入してもお互いに返している。殺したりはしない。返しましょう」「お願いします」ということになった。私が「煙草を持って来ている、一服吸いませんか」と煙草の箱を差し出すと、「うちの方にもあるからいらぬ」と言う。「遠慮せずにごぞ」「いりません」「お菓子はありますか」「お菓子もいりません」「用件はありませんか」「ないです」「じゃ、さようなら」「さよなら、さよなら」で、無事帰

隊した。

ソ連兵は満州側に逃亡して来たことは確実であった。本隊に護送しなければならぬ。江岸道路（氷上道路）は奪取される恐れが大いにあり、冬でも夏でもめったに通らない。山道を行くしかない。山道案内を兼ね警防団長と私で護送することになり、夕暮れとともに先頭に警防団長、次にソ連兵、次に私が後から護送した。深い雪道を寒さは零下五十度、ソ連兵は我々が出してやった歓待の御馳走を食べ過ぎ、度々のトイレ（下痢）で下馬するので野宿することも出来ず、四苦八苦の厳しい護送であったが、翌日夕方本隊に無事着き、護送の任務を終了することが出来た。

昭和十九年六月一日付をもって黒竜江省遜克県奇克隊へ転勤。五年間、日本人二、三人しかいない秘境の土地に頑張った苦しみ、重苦しい気持ちがいまだによみがえってくる。

妻とは昭和十七年六月結婚、十八年五月出産を迎えた。勿論産婆もいない村で、私が産婆となって長男を

無事とりあげた。

昭和十九年、関東軍の精銳は逐次、南方へあるいは本土防衛のため減少しつつあり、私も妻子と別れて召集された。これからの話は、軍隊勤務の話ではなくシベリア抑留の苦しみ、特に、前職のソ満国境で警察官として勤務したための生死の分かれ道ともなった拷問の数々についてである。

昭和二十年九月十三日、黒河の対岸、ブラゴエシチェンスタクを出発、黒竜江を一カ月余り貨物船（はしけ）にて下流河口近くの尼港事件のニコライエフスクに到着し収容所に入れられた。

十月下旬寒さも厳しくなってきたが、防寒具が来ないため編上靴で作業に出る。誰もが足踏みばかりして寒さに耐えているが、凍傷になる者も出てきた。

長い船旅の際、生水を飲み下痢が甚だしく、栄養失調となり死者も出る。私も二十一年二月病氣となり入院中、ソ連の身元調査が始まった。遂に恐れていた呼び出しを受けた。身分を隠して後ではれたら大変不利

になると思い、元警察官であることを率直に申し述べた。

調査に来たのは日本婦人で、身長約五尺ぐらいの肉で、一見玄人風に見える三十四、五歳である。日本の本籍地、職業、年齢等を聞き、約一分間ぐらいで終わった。婦人は横浜の生まれと言ひ若干雑談をした。

病氣も回復、病院の世話係となる。四月下旬頃收容所より、黒河警察隊関係者九人がハバロフスクへ護送されたとの情報を受け、さあ大変だ、我が方へもくるぞと、いろいろ思案していた。

遂に呼び出しを受けソ連側に連行された。前に調べに来た婦人の時と同様、日本の本籍地、職業を指物大工（建具職）をしていたが、物資不足で仕事が出来なくなり、仕方なく満州の警察官となるまでの状況を話したら、「満州の勤務地はどこか」と聞かれ、地名を日本語、中国語、オロチョン語で答えると「国境からどのくらい離れているか」と聞かれた。こいつ地理に明るくないな、国境の第一線なのに「どのくらい離れ

ているか」と聞いている。私は内心、一か八か、当たって砕けろと思ひ「国境から約二十里程離れた小さい警察所だ」と言うと、「何の係をしていたか」と問う「経済、保安係だ」「国境のことはあまり知らないか」と言うので「よく知りません、満人はばかりで中国語なら少しばかりわかります」と答えた。しばらくすると、中国人が来て話しかけて来た。官庁用語は使わず一般労働者用で、一分ぐらい会話をした。官庁語になると「私は小学校しか出ておらず、難しいことは判らぬ」と答えた。

それからしばらくして、ソ連側より「満州国の警察官の肩書を書け」と言われた。私は、改正前、改正後を知っていたが、警士から警佐までしか書かなかつた。警正の階級章を見せ「この肩章を知っているだろう、お前は〇〇へ行ったことがあるだろう」と大声をあげた。「私の勤務する小さな隊にはそんな偉い者は来ない。そんな階級の人は来ない」と言い返した。彼は大声で「国境の方から来ただろう」と、しつこく言い出した。「国境勤務の人が、全然用件も無くて来る

必要もない」と答え、その日は三時間ほどで病院へ帰された。

二週間ほど過ぎてまた連行され「九人の名前を知っているだろう、知らないはずはない」と言い出した。私は「絶対知らない」と言ったが、ソ連側は「病院へ来る前の収容所にいた時知っているはずだ。お前知っている者の名前を書け」と責める。その間、入れ替わり、立ち替わりソ連側の追及は激しい。私は「孫呉の兵舎から来た二等兵である。そんな人は知らない、知らない」と泣き出すと、鼻水を流し涎をたれながら、二時間も、三時間も粘り、阿呆の如く泣いた、泣いた。小便もたれ流し、這いつくばってしまった。食事もくれず、水もほんの少しコップ四分の一ぐらいしかくれず、拳銃を突き付け、なお追及する言葉も敵しく苦しいが、私はここが限界だと思い、阿呆になり、鼻水を流し、涎をたらし泣いた、泣いた。

三日過ぎて突然取り調べが変わった。病院内の憲兵、警察官、共和会、反動分子がいないか「日本兵の動向」を調査をして状況報告せよ、との指令を言いつ

けられた。同僚を売ることは出来ない。報告しても氏名、階級、年齢等をちぐはぐに書き、文書も片仮名、ひら仮名、満字、当て字等様々にまぜこぜで作り報告をしていた。いつも「情報丙」でぼろくそに言われた。

私の仕事は病院の馬七頭の世話をし、三キロほど離れた小屋（解剖室）へ、日本兵の死体を運搬するのである。担架に真っ裸で敷布一枚を死体の上に着せて、というより載せるだけ、口の中に番号札が入れてある。解剖室内には幾体（約十体ぐらい）も頭、胸、腹、その他各部位を切られた同胞が置かれている。

担架と敷布は持って帰らなければ、国有財産紛失で処罰される。気の毒やら、むごたらしいが致し方ない。「コトン」と死体を落として帰る。凍結はしているが、実にいやな作業である。「運命だ」。ただ涙々である。合掌して帰る。

病院の医師が出向する時も、馬糞を仕立てて乗せる。蒙古系の医師の家に連れて行かれたとき、飲めない酒を「飲め、飲め」と言われ、彼が私の脈を計りな

がら飲ませる。私が実験台である。いろいろと話をするが、決して心は開かない。いつも警戒心は心の奥底に潜み、用意周到に行動していた。

冬も過ぎ去り、四月二十九日前夜から、今日一日ソ連側の警備が厳しくなる。「これはどうしてであろうか。ああ！ そうだ天長節だ」。天皇崇拜主義の日本兵が何を起こすかわからないので警備を厳重にしたのであろう。日本兵の患者達は「昨夜は、ソ連兵の警備がえらく厳重だった。どうしてだろう」と皆、口々に言っていた。

私はこれを情報にしようと思い「貴国の民主教育が非常に効果を得て、日本兵の頭の中には、もう天皇崇拜の心は消え去っている。天長節なんて念頭から消えている。昨夜の警備の状況なんか、チンプンカンプンで、どうしたのだろうと不思議がっていた。ソ連の民主教育の効果の表れである」と、報告をしたら「確度甲」と誉められた。

尼港収容所も閉鎖されると共に病院も閉鎖し、皆引

き揚げて行った。私は民主教育の本拠地コムソモリスクで下船、鉄條網が二重、三重に張られた小高い山頂の収容所に送られた。皆、戦犯の汚名を着た人のようである。一〇〇パーセント仕事をしなければ収容所へ帰れない重労働の収容所だ。

ここでも病気になる入院診察を受けた。尼港収容所の時懇意であった竹岡軍医に再会し、身の危険が迫っていることを知らされた。長い間いると生命がないと。今、患者から一団体ナホトカへ出る。何とかして組に入れるから、ソ連側軍医の検査があるが、見せないように、「僕の使役で出ている、カルテはこれだ」と言つて、カルテ一本で通すから僕の願いもある……と、夜間密談して諸件につき打ち合わせをした。

私は、極薄い美濃紙（四センチ×一五センチ）に極細い字で八十余人の住所、重要事項を書き、上衣の袖口（私は小さいので袖口を二重に縫いつけてある）に縫い込み、外部から触れられたり、揉んでも音がしないようにした。

患者の団体より若者二十人が、未だ帰国するのは早

い、ソ連のためにもう少し残って働きたいと申し出た。そうすることにより、この団体は民主教育が行き届いていると見なされ、第二收容所（身分関係）をパスして第三收容所へと移動し、万死に一生を得た私は、昭和二十二年九月下旬、「恵山丸」にて帰国することができた。まさに、万感胸に迫る思いであり、思えば次の三点が生死の分岐点で、本当に万死に一生を得たと、神仏の良運の加護があったものと思う。

一、ソ連側の取調官は地理に明るくなく、地名がよくわからず、国境地帯でも第二線と判断し、私もその点に食い下がって思う壺にはめることが出来た。

二、九人の護送事件の時は、阿呆になりきり、鼻水を流し、涎をたらしながらいつも泣き、小便もたれ流して三日間飲まず食わず這いつくばって辛抱した。

額勒和哈達勤務時「痔」を思い、治療するため一カ月間の断食修業をした時の体験が生かされた。

また、私は昭和二十年五月十七日召集令状により孫呉の部隊へ二等兵で入隊し、警察中隊（参戦と同時に編成された国境警察官ばかりの隊）とは別行動をとっていた。

三、竹岡軍医と再会、密談、患者団体に入り「ナホトカ」へ出た。若者二十人の残留作業を申し出て、第二收容所をパスして、第三收容所へ移動出来た。（その時ホッとした）

以上の三点が生死の分岐点である。

しかし、今でも、馬糞にて死体を解剖室に運搬した状況を思い浮かべ、万感胸に迫る悔し涙が出る。ソ連の研究材料になっただろうが、むごたらしいものである。

私も子供二人を亡くしている（兄は新京、妹は奉天で死亡）。そのため、平成九年五月十七日、総本山善通寺にて得度をした。僧名「祥瑞」となり、皆様の冥福を祈っている。合掌